

## トピックス

# 縄文時代はいつから？

中央大学文学部准教授

小林 謙一

縄文時代<sup>(1)</sup>は、後氷期の環境の中で土器を持つが農耕をおこなわない日本独自の新石器文化の時代と理解されてきた。しかし、近年の研究により異なった姿がみえてきた。それは日本史のみならず、人類の発展段階として大きな問題を含んでいる。

縄文時代の始まりはいつとされているだろうか？ 現行の高校教科書には、次のように記載されている。「縄文時代のはじまり いまから約1万年前、完新世になると、気候は温暖化し海面が上昇して、日本列島は大陸からはなれ、現在のような自然環境になった。(中略)大きく変化する自然環境に、人々は新たな道具を作り出して対応した。木の実など植物性食料を煮るために土器が作られ、動きの速い中小動物をとるために弓矢が使われるようになり、木を伐採し加工する木工具として磨製石器が発達した。(中略)縄文時代は約1万2千年前にはじまり、およそ1万年にわたって続いた」(実教出版「高校日本史B」平成23年14-15頁)。もう一冊の日本史Bではより詳しく、約1万5千年前頃に境に地球は温暖化へ向かったこと、「約1万2千年前に土器の使用と磨製石斧や弓矢の発達、定住性の高い狩猟・採集生活」と書かれ、註として「草創期の隆起線文や爪型文をもつ最古の土器は、旧石器時代末期に発達した細石器とともに出土することがある。放射性炭素<sup>14</sup>Cによる年代測定法によれば、草創期の長崎県福井洞穴の年代はいまから1万2700±500年前」とされる(実教出版「日本史B」平成23年29-30頁)。

他社の教科書でも同様の記載であるが、東京書籍版では注釈として「縄文文化のはじまりは、放射性炭素<sup>14</sup>Cによる年代測定の研究によれば、約1万3千年前と推定されている」(東京書籍「新選日本史B」平成23年8頁)、山川出版社版ではさらに詳しい注釈として「放射性炭素<sup>14</sup>Cによる年代測定(炭素14年代)では約1万2000年前とされてきた。(中略)この方法は過去から現代に至る大気中の<sup>14</sup>Cの濃度は一定との前提に立つが、実際にはその濃度

は変動していることが知られている。最近ではAMS法(加速器質量分析計)の採用によって高精度化した炭素14年代を、さらに年輪年代法などの確実な方法によって補正する研究が進み、縄文時代のはじまりは1万6500年前にさかのぼる説が出された。ただこの補正年代を認めない研究者もいる」(山川出版社「詳説日本史B」平成23年6頁)とされる。

以上をまとめると、縄文時代の始まりの様相について、教科書にある現在の定説では約1万年前に氷河期が終わり、大型獣が減びて代わりに照葉樹・広葉樹が森林を形成するという環境の変化に応じて、旧石器時代の遊動民が大型獣を追う狩猟中心の生活から、採取した木の実など植物性食料を土器で煮炊きして食するようになり、一定地域に定着的な生活を始めたと理解してきた。しかし、この10年間に土器付着物の炭素14年代測定など研究成果が進み、青森県大平山元I遺跡の無文土器は1万5000年以上前の土器で、確実な測定例としては世界最古の土器の一つと評価できることがわかった。土器の初現は、まさに氷河期の最中にあったのである。

このように、「縄文時代の始まり」については、年代が揺れている。これまでの定説では1万年前または1万2千年前といわれていたのが、1万6500年前とされる説も出てきた。これは単に古くなったと言うだけではない。1万6500年前というのは氷河期の真最中である。とすると「暖かくなって堅果類を煮るために土器が作られた」という説明は間違いになる。さらに考えると、氷河期の最中に当たる文化は「縄文時代」でいいのか？ということになる。

さて、この問題はいくつかのレベルでの議論が組み合わさっていて、わかりにくい。そこを、まず整理しておきたい。1)土器出現の年代を明らかにすること、2)そのときの環境や文化的な評価、3)旧石器時代から縄文時代への画期を何に求めるか、の3つの課題であり、1)については一番古い土器はどの土器か、その年代をどのように決定するか、という二つの側面がある。順番にみていきたい。

## 1. 一番古い土器は何か、何年前か？

そもそも最も古い土器は縄文土器研究が進むにつれて次々さかのぼって発見されてきた。それは、大正から昭和前半期を中心に縄文土器編年の基礎を作った山内清男博士が、日本列島における最古の文化を探るのは一番古い土器を探すことでわかったとした

ことにより、より古い層から出土する古い形の土器を探ることが大きな課題となってきたからである。

1949年の岩宿遺跡の発見により旧石器時代が確認されると、最古の土器が最古の日本列島における人類文化ということではなくなったが、縄文文化の始まりを知るための重要性は変わらず、繊維土器→撚糸文土器と最古の土器は置き換えられてきた。

一番古い土器は、考古学的な遺跡の調査によって埋まっている層位の順番、一緒に出てくる石器のタイプ、土器自体の製作方法や装飾の仕方から相対的な順番はわかり、日本列島の中でどの土器が古いか(相対年代とよぶ)は考古学的に決めることができる。しかし絶対年代は従来の考古学的手法のみではわからない。そこで一定の速度で崩壊していく炭素14という元素の量を測ることで経過時間を知る炭素14年代測定法によって年代を調べるようになった。

1959年頃には縄文時代早期撚糸文式土器を出土する神奈川県横須賀市夏島貝塚で測定された<sup>14</sup>C年代をもとに、芹沢長介によってその時点で世界最古の土器出現となる約9000年前に縄文時代が始まるという絶対年代観が提示され、<sup>14</sup>C年代に反対する山内清男との間で激しい論争が生じた。

1960年代には愛媛県上黒岩岩陰遺跡や長崎県福井洞穴の調査から、尖底の器形をもち口縁近くに横走する粘土紐で装飾する隆起線文土器が芹沢らにより最古とされ、<sup>14</sup>C年代で1万2000年前とされた。

その後も隆起線文土器は、旧石器時代の石器を出土する関東ローム層と縄文早期土器を出土する黒色土層との間の漸地層など古い地層から発見され、山内清男の目指した「縄文土器の底」はほぼ確定し縄文時代早期の前に縄文時代草創期として位置づけた。

しかし、1998年に青森県大平山元I遺跡でそれまで旧石器時代の最後と考えられていた石刃や石槍、局部磨製石斧に伴う無文の土器片が出土し、<sup>14</sup>C測定結果の較正年代で、1万6500年前とされ、大きなニュースとなった。これまで最古の隆起線文土器よりはさら



愛媛県上黒岩岩陰遺跡出土隆起線縄文土器 (久方高原町教育委員会蔵)

に古い土器であることは共伴する石器が旧石器時代の特徴を持つことから明らかで、土器の出現をさかのぼらせるものであった。<sup>14</sup>C年代では1万3000年前で、年代的にも確かにさかのぼるものであったが、<sup>14</sup>C年代を年輪年代との比較から暦年に補正する較正年代で計算し、最も古く計算すると1万6500年前になるという意味もあった。

炭素14年代の較正とは、以下の補正方法を指す。年代測定を始めたリビーは、<sup>14</sup>Cの量を調べて物理的な経過年数を知るために、過去の<sup>14</sup>Cの量を一定と計算して年代としたのである。しかし、実際には過去の大気中での<sup>14</sup>Cの生成量が異なるので、正確な年代ではないことが年輪年代との比較で判明した。そのため、樹木の年輪に含まれる過去の<sup>14</sup>Cの量と対比させることで暦年代に補正する方法である。過去にさかのぼるほど実年代と<sup>14</sup>C年代の差が激しくなり、1万年を超えるあたりでは2000年古くなる<sup>(2)</sup>。大平山元I遺跡は13000<sup>14</sup>C BPの炭素14年代測定値を較正しさらに古いことがわかったという面もある。ただし、現在では大平山元I遺跡の測定値のバラツキの平均値を用い、さらに改定された最新の較正曲線を用いると、大平山元I遺跡の無文土器は1万5000年よりは古く1万6500年までの間の一時点と考えるようになった。

大平山元I遺跡と類似した無文土器や隆起線文直前の可能性がある簡便な装飾と考えられる土器が、関東(茨城県後野、向野A、東京都前田耕地、田無南町、神奈川県相模野149、寺尾、勝坂遺跡)・北陸(新潟県大刈野遺跡)・東北地方(青森県大平山元I遺跡)と南九州(鹿児島県横井竹ノ山、加治屋園遺跡)など10箇所ほど見つかっており、共伴する石器の様相から大平山元I遺跡や後野遺跡などの無文土器が最古の土器と位置づけられる。

## 2. 環境・文化の変化—東アジアでの土器革命—

日本列島と同じく1万5000年をさかのぼる年代が得られている中国南部やアムール川流域の初期土器群とともに、日本本州島東部が世界でも最も古い土器の故郷であった。中国南部・アムール川流域と日本列島とは隔絶した位置にあり、ほぼ同時期に多元的に土器が出現したと考える。その時の環境は、まだ氷河期の針葉樹林であり、落葉広葉樹のドングリヤクリなどが繁茂する植物相ではなかった。

地球の気候はおおよそ10万年周期で寒冷な「氷期」と温暖な「間氷期」と変化する。今から約3万

～2万5000年前の最寒冷の時期には海面は今より120m以上低かった。北海道島は大陸と地続きで、本州・四国・九州島は瀬戸内海もなく一体をなした弧状の陸地で、津軽海峡・対馬海峡は僅かに海峡をなしていたが凍結していた可能性もあり、本州島にもナウマン象など大型獣が大陸からわたってきていた。沖縄県の湊川人や静岡県浜北の人など、旧石器時代人骨が見つかっており、約3万5000～4万年前には新人が大陸から渡ってきて旧石器文化を展開していた。ナイフ型石器など日本列島独自の石器文化が日本列島東西の地域でやや形を異にしながら広がっていた。約1万8000年前にはシベリア地方から北海道を経由して細石刃文化が伝わっており、マンモス、ヘラジカやナウマン象、オオツノジカを含む大型獣を対象とした槍による狩猟が主体的で、遊動的な生活をおくっていた。

1万5000年前になると、100年間に気温が8℃上昇する急速な温暖化が生じた。福井県水月湖湖底堆積物の花粉分析によると植生もツガ属、マツ属、トウヒ属など亜寒帯性針葉樹林から現在の植生に近いコナラ属、ブナなど落葉広葉樹林へ変化した。また、対馬海峡が大きく開き海流が流入したことにより、日本海側はブナ林が広がり、冬期の降雪量が増えるなど寒暖の差が激しくなるなど変化も大きかった。1万3000年前から再び寒冷化し、氷河期に戻るような気温の低下で「ヤングドリアス小氷期」とよばれる。1万1500年前に氷河期が完全に終わり温暖化し、今よりも2℃ほど平均気温が高い縄文海進期となっていく。1万5000～1万1500年前は大きな気候変動の時期に当たるのである。

### 3. 旧石器時代から縄文時代への画期

さて、縄文時代の始まりはいつだろうか？これにも現在のところ様々な意見があるが、最も一般的な意見は、土器の初現—すなわち現在の所は大平山元I遺跡とそれに併行する神子柴・長者久保の石器文化の段階—をもって縄文時代とする小林達雄の意見である<sup>(3)</sup>。しかし、共伴する石器文化は明らかに晩期旧石器時代の産物であり、かつ出現期の土器は列島全体でも10遺跡ほどに過ぎず、同時期のほとんどの遺跡には土器は認められない。また、土器には文様もなく、定型的な形も認めがたい。即ち、旧石器時代の文化の中に、先行的に土器が出現したと見ることが可能である。さらに土器の出現という点に限れば、焼成粘土塊や生焼け状の土製容器を含め土

器という器物自体はさらにさかのぼる可能性があり、縄文時代の底を現時点では決められないことになってしまう。

一方、谷口康浩は、石皿・磨石という植物質食料加工技術が卓越し土器の多量保有や明確な集落が現れて定住的な生活が明らかとなる縄文早期撚糸文土器段階からを縄文時代とするべきで、土器出現後の縄文時代草創期に相当する部分は移行期とするべきと主張している<sup>(4)</sup>。しかし、後述するように多くの点で縄文文化に連続する縄文草創期段階の位置づけが不明確となってしまふ。

小林謙一は、縄文時代草創期すなわち縄文文化のはじまりの画期として、日常的に装備される通常の道具としての土器が列島全体に広まった隆起線文土器の成立をもって考えるべきと論じ<sup>(5)</sup>、その後の縄文時代を特徴づける他の文化要素を合わせ見る必要を考えた<sup>(6)</sup>。

- 1) 広域的な土器型式ネットワークの形成
- 2) 住居状遺構の構築と岩陰・洞穴居住にみられる定住化の促進
- 3) 有茎尖頭器・石鏃・矢柄研磨器にみる弓矢の完成
- 4) 線刻礫（石偶）・土偶など精神遺物の一般化

1番目については、1万5000～1万4000年前に盛行する隆起線文土器が、ほぼすべての集団が保有し、かつ地域ごとに文様スタイルが発達しつつ広域に共有情報を持つという、その後の縄文土器型式のネットワークを完成させていることが重要である。2番目についてはシェルター的な居住施設は後期旧石器時代に認められるが、堅穴化または柱穴や炉の存在が一般化することで定型化していき、草創期後半のヤングドリアス期に対比される寒冷期の堅穴住居につながる系譜を持つ隆起線文段階の居住施設が重要である。3番目は、石器の変化である<sup>(7)</sup>。石鏃の一般化として弓矢が確実に装備されるのは草創期後半であるが、愛媛県上黒岩岩陰遺跡9層出土例など隆起線文土器段階に有茎尖頭器とともに石鏃が用いられていることが明確となった。4番目の精神文化としては、旧石器時代ユーラシア大陸の象牙製ヴィーナスとの関係はまだ不明だが、上黒岩9層の石偶は草創期後半の三重県井尻見遺跡の土偶につながっていくと考える。

以上のように、隆起線文段階にその後1万2000年以上続く縄文文化の基盤が成立していると考え、縄文時代のはじまりを隆起線文土器初現のタイプで

ある東京都御殿山遺跡での炭素 14 年代測定で較正年代から 1 万 5000 年より新しい頃、すなわちいったん温暖化した頃とする。この場合、出現期の無文土器は伴う石器群や土器出土遺跡の少なさから、あくまで旧石器時代に先駆的に土器が用いられたととらえる。例えていえば明治維新前の幕末期にあたるだろう。さらに様々な文化要素の出現状況や環境変化との関係を検討し、土器の発生、土器の一般化のどの段階に縄文時代の始まりという時代画期を求めるのか、さらに議論を深めていく必要がある。

#### 4. 土器はなぜ日本列島で生まれ発達したのか？

チャイルドが言ったように、土器は人類史上はじめて化学変化を利用した道具の獲得であり、自然界から篡奪するものでも偶然入手するものでもない。土器を手に入れたことにより、定住化など様々な変化を手に入れることができるようになったと考える。

土器による煮沸で効率的に摂食することが可能となったことは大きい。土器は日本海側の海流の変化に伴う植生の変化、すなわちトウヒ属を主とした亜寒帯的な森林環境からブナなど落葉樹林が混合した自然環境のなかで生まれた、と考えられる。土器は、寒冷地にも存在したブナの実や場合によっては樹皮などを煮沸することで始まり、ドングリ類などがしだいに出現してきたことで、渡辺誠の指摘のように植物質食料のアク抜きなどのため、利用が拡大したと考える。

#### 5. 東アジアの土器出現期の様相

日本列島の土器は、河川沿いに内陸部まで分布することから魚類の煮沸による魚油採取のために発明されたと考えるロシアのアムール川流域の発生期土器（15000 年前くらい）とは異なった系譜で生み出されてきた可能性が高いだろう。近年見いだされてきた中国南部の古い（18000 年前との測定値もある）土器の成立も含め、東アジアにおける土器の出現は、多元的に始まった可能性がある。東アジアが世界最古の土器の産地であることはまちがいない、その一箇所が日本本州島東部であることはまちがいない。

西アジアなどと異なり、農耕の起源と無関係に土器を生み出したことが確実である。従来の農耕・牧畜の発明を中心に置いた「新石器革命」についても見直しが必要になった。農耕に重きを置いたヨーロッパ的な文明史観では土器は農耕の副産物に過ぎないが、それは過小評価である。日本列島での歴史の

みならず、人類史的な発展段階についても、その環境への適応や技術的手段としての土器の発明が、重大事件であったことは間違いない。

土器の成立、そして日本列島の豊かな自然環境に適応した縄文土器文化は、環境資源の浪費に悩む現代社会にとって、第一に参照すべき鏡であるといえるだろう。火の発明、言葉の発明、道具の利用に次ぐ、人類史上の大発明が土器の発明であり、それが日本列島において氷河期におこなわれたこと、その後日本文化の基盤をなす縄文文化に育ったことは、大きな意味を持っている。

従来の縄文時代は縄文土器のある時代で採集狩猟が生業として規定され、氷河期以降の自然環境に適応した文化の時代としてきた。しかし、晩氷期において土器が出現していること、縄文時代後半期にはなんらかの栽培植物が存在することが明確になり、縄文時代自体の見直しが迫られている。

歴史研究では、まだ不明な部分も多い。縄文時代の定義や範囲など基本的な時代認識が未確定なのかととらえられると、考古学は未熟な学問分野だと思いかもしれない。確かに考古学には、発見によって学説が変わっていく不安定さがある。だからこそ、次々に発見される新たな事実から、歴史を再構成していくおもしろさを感じていただきたい。

- (1) 縄文時代の語は、縄目の地紋が施されている土器＝縄紋土器からきているので、本来は「縄紋時代」が正確である。山内清男が縄文土器研究の礎を築いた昭和前半には縄紋と表記されていたが、佐原眞・小林達雄らの提唱により、現代は簡便な字で縄文と表記することが一般的である。
- (2) 年輪が残されていない 1 万 2000 年より古い段階はサンゴや湖底堆積物の年縞など別の試料との比較で較正されることもあって正確さにやや欠け、現在も改定が進められている。
- (3) 小林達雄 1996『縄文人の世界』朝日新聞社
- (4) 谷口康浩 2011『縄文文化起源論の再構築』同成社
- (5) 隆起縄文土器を大量製作などの特徴から縄文土器のはじめとする考えは林謙作などによって主張されている。一方で大塚達明らの指摘により、隆起縄文以前の寺尾遺跡等の土器から連続的な系譜が追えることも考えられる。さらに資料的蓄積を待って縄文土器の範囲を検討していく必要がある。
- (6) 小林謙一 2010『縄文文化のはじまり 上黒岩岩陰遺跡』新泉社・小林謙一・工藤雄一郎 2011『縄文はいつから!?』新泉社
- (7) 石器では、石鏃以外に有舌尖頭器と呼ばれる小型の槍先形石器のうちの花見山型などの小型品が鏃に用いられた可能性がある。ほかに、九州地方を中心に草創期に急増する磨石・台石など植物質食料加工具の増加に注目する見解もある。また、日本では後期旧石器時代の古い段階から大型獣の解体に用いられたとの説もある磨製石斧が存在するが、草創期には木の伐採に用いられたことが確実な丸ノミ状の刃を持った局部磨製石斧が出現することも特徴的である。旧石器から続く細石刃の九州地方での残存など、検討すべき問題も多い。